

大学の授業における学生の学びの動機付けを促す要因 —教員・学生間の相互作用に注目して—

吉田博¹⁾、香川順子¹⁾、金西計英¹⁾、福田スティーブ利久²⁾、戸川聡³⁾

1) 徳島大学大学開放実践センター 2) 徳島大学全学共通教育センター

3) 四国大学経営情報学部

1. はじめに

近年、我が国の大学の授業においては、単位制度の実質化が問題にされるようになり、Benesse(2008)にもあるように、授業外学習を学生に求めていくことの必要性が述べられている。大学生を対象とした各種調査においては、学生の授業外学習の時間が少ないことが明らかにされており、例えば以下の調査があげられる。葛城(2008)の調査によると、授業と関連のない学習を含んでも4割程度の学生は1日1時間程度の学習すら行っていないという結果が出ている。また、Benesse(2008)、電通(2008)における調査などでも十分に授業外学習を行っているとは言い難い結果が出ている。一方、2008年12月24日に「学士課程教育の再構築に向けて」の中で学士力が提示され、大学の授業における質保証や単位の実質化についても述べられている。これらの背景から、学生の授業外学習の問題や大学における教育の質向上が課題となり、授業の在り方が問われている。能動的学習を促すための授業レベルでの取り組みは、さまざまな形で行われていることがわかっており(溝上2007)、大学の授業における授業形態の在り方を見直し、現代の大学生に必要な学びの支援を構築することが課題になっている。

2. 研究の目的と方法

授業の構造と学生の学習行動の因果関係については、以下の先行研究により明らかにされている。藤岡(2001)によると、大学の授業において、授業の構造と学生の学習行動の両者の間には、かなりの程度の相関を見出すことができるとある。ここでの、授業の構造とは、日時、講義名、受講者数などの基本的情報、課題、教員の発話など、

授業に関わるさまざまな要素のことを指している。また、学生の学習行動とは授業リフレクションシートを用いて、授業において学生に発見があったか、知るという経験ができたか、問いが生まれたり確かめたいという欲求が生まれたか、そしてさらに調べる、聞く、読む、ふりかえる等の行動化がはかれたかを調査したものである。また、溝上(1997)によると、学習行動において、学習者自らが奮い立って内発的動機付けを引き起こすことは希であり、多くの場合、学習者の内発的動機づけの状態は、授業の構成要素、教師、学生のパーソナリティや自己概念等様々な要因が絡み合って成立すると言われている。これらの研究から授業構造のみならず学生のパーソナリティといった個人特性など多様な要素が適切な形で組み合わされることで、学習意欲が促進され学生の主体的な学びが引き起こされると考えられる。

一方、現代における、学習理論については、久保田(2000)が構成主義をもとに、現代社会での「学び」の基本が人と人とのコミュニケーションにあり、学生と教員、学生同士の対話を通じた学びの重要性について述べている。そこで、本研究では、教員、学生間の相互作用を通して、どのような学びの動機付けがなされているのかについて、学生の授業外学習を行う動機と、授業の要素との因果関係を、質的なデータをもとに分析する。本報告では、調査データの分析結果の報告と、今後の課題の検討を行う。

具体的な方法としては、筆者が対象となる授業を毎回参与観察し、教員の言動、態度、教員と学生とのやり取りを中心にビデオ撮影を行った。同時に授業の展開、注目すべき教員の発言、学生の様子、教員と学生とのやり取りなどを記録した。

また授業終了後に 5 分程度、学生に 1 週間を振り返ってもらったための「リフレクションシート」を記入する時間を取った。このシートは、授業外学習の時間、学習内容、学習をするきっかけになった出来事などを記述するものである。また、学生によるリフレクションシートの記述内容とあわせて、直接学生に事実確認も行った。

3. 対象授業

2009 年度後期に実施された授業のうち、英語と数学の 2 つの授業を対象とした。英語の授業は共通教育のプレゼンテーションを中心とした発信型の授業で、工学部 1 年生の 20 名が履修している。数学の授業はグラフ理論に関する工学部の専門科目で工学部 1 年生の 10 名が履修している。以上の授業は、履修人数が少なく、学生と教員とのかかわりを観察するのに適しており、また担当教員も、自身の授業で学生の主体的な学びを促すと思われる相互作用の多いため対象とした。

4. 中間報告

分析方法としては、授業外学習が継続的に行われている学生や途中から学習時間に変化が見られた学生に注目し、リフレクションシートの学習を行ったきっかけに関する記述や、授業内での教員と学生のやりとりから、学習動機と授業の要素との関連を考察した。また、クラス全員のリフレクションシートにおいて、平均の授業外学習時間の移り変わりに注目し、大きく変化があった授業について、学習を行ったきっかけに関する記述や教員の言動から、因果関係を考察した。表 1 は、各授業における授業外学習時間の平均を表したものである。詳細については発表の際に報告するが、以上の分析から見てきたことを記述する。

表 1 の数学の授業において、3、5、7 回目の授業外学習の平均時間を見てみると、3 回目から 5 回目にかけて増加し、7 回目も学習時間が長いことが分かる。これは、演習による課題が出されていたことにもよるが、教員は授業中に、学生に板書をさせ、解説を求めたり、言葉の定義を確認したりというような問いかけをしている。そのため、

学生のリフレクションシートの中に、「説明ができるようにした」、「説明できるようにしっかり考えた」といった記述がみられる。学生に課題をさせるだけでなく、やってきた問題の説明や語句の確認をすることで、より深い学習をすることが分かる。

表 1 クラス全体の平均学習時間 (分)

授業回数	第1回目	第2回目	第3回目	第4回目	第5回目	第6回目
英語	12.2	36.7	55.8	41.2	75.0	32.8
数学		3.0	29.5	14.0	42.0	11.5

授業回数	第7回目	第8回目	第9回目	第10回目	第11回目
英語	46.5	67.7	38.0		
数学	38.6	32.5	22.8	15.0	13.5

※数値は前回の授業から今回の授業までの間に行われた、対象の授業に関する授業外学習時間の1週間あたりの合計時間を表している。

5. まとめと今後の課題

今回は、ある特定の 2 つの授業をもとに、学生 30 名のリフレクションシートから、質的に分析することで、学生の授業外学習のきっかけとなる要素がいくつか見えてきた。しかし、一般化をはかるためにも、今後は対象授業（や学生）を増やし、研究を進める必要がある。

6. 参考文献

- 藤岡完治 (2001) 大学授業の構造と学生の学習経験の関連に関する研究. 京都大学高等教育研究, 7: 1-23
- 溝上慎一 (1997) 大学生の学習意欲. 京都大学高等教育研究, 2: 184-197
- 溝上慎一 (2007) アクティブ・ラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究, 7: 269-287
- 葛城浩一 (2008) 学習経験の量に対するカリキュラムの影響力. 広島大学大学院教育学研究科紀要第 3 部, 57: 133-140
- 久保田賢一 (2000) 構成主義パラダイムと学習環境デザイン. 関西大学出版部
- Benesse (2008) 大学生の学習・生活実態調査報告書. Benesse 教育研究開発センター
- 電通 (2008) 大学生のキャリア意識調査. 電通育英会
- http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/to_2008.html#anc02 (2010. 1. 15)